

身体部位への言及：その日英対照

嶋 田 裕 司

Reference to Body Parts in Japanese and English

Hiroshi SHIMADA

1. 「手」と hand による慣用表現

日本語でも英語でも、物を取得することを表現する際に、「得る」「取る」「買う」、get, take, buy などの動詞を用いて、「私はその絵を得た」I got that painting. のように言うこともできるが、「手」と hand という名詞を用いて、「私は新しい電池を手に入れたい」I'm hoping to lay my hands on some new batteries.... (BNC AN7(981)) のように表現することもできる。名詞を用いた対のうち日本語の文は、私の作例である。しかし、実際に用いられた例の中にも、次のような翻訳とその原文がある。(1a)は、(1b)の英文を訳したものである。二つを比べると、「手に入れて」の部分が lay your hands に相当することがわかる。¹

- (1) a. …タヒチにいたイギリス人の画家ってのを知ってるか？ どうもそいつが天才らしいんで、その絵があれば、こいつはたしかに金になる、だから、ひとつそちらで手に入れて、早速パリへ送ってもらえないだろうか、 (中野291)
- b. Do you know anything about an English painter who lived in Tahiti? It appears that he was a genius, and his pictures fetch large prices. See if you can lay your hands on anything and send it to me. (WM176)

ここで興味深いことは、ほぼ同じ身体部位を表わす「手」と hand が用いられているにもかかわらず、動詞「入れる」と lay はかけ離れた意味を持つことである。その動詞の相違に依じて、「手」と hand は異なった意味役割を果たしている。先ほどの作例「私は新しい電池を手に入れたい」に戻って、文中の名詞表現が、移動概念の中で果たす意味役割について考えよう。「私」は話題であると同時に、移動という出来事を引き起こす人物としての役割を担っている。「新しい電池」は移動するものを表わし、「手」は、電池が到着する所を表わしている。言い換えると、「私」は行為者(agent)、「電池」は移動者(mover)、「手」は到着点(goal)である。² それに対応する英文 I'm hoping to lay my hands on some new batteries.... では、主語の I が行為者である点は同じであるが、移動者と到着点の関係が逆転していて、my hands が移動して、some new batteries に到着することになっている。逐語的に訳せば、「私は新しい電池に手を置きたい」となるが、この表現では〈取得〉の意味が表わせない。〈取得〉という慣用的な意味を表わす際に、日本語と英語で意味役割が逆になっているのは、なぜなのだろうか。

この問いに対する答えに、すぐにたどり着くことはできない。ここでは、そこへ到る準備として、上の例に見られる日本語と英語の相違をできる限り明確に描くことを目的とする。はじめに、「手」と hand を用いた慣用表現のうち、比較しやすい範囲の事例を観察する。その結果に基づいて、第2節で、他の身体部位にまで一般化した仮説を立て、それに関連する事実を記述する。観察の対象は、「口」mouth, tongue と「耳」ear を用いた表現である。この論文の目的は、疑問に説明を与える理

論を提示することではなく、説明されるべき事実の広がりを探ることである。

さて、「手」と hand を用いる移動表現のうち、単なる移動ではなく何らかの慣用的意味を持つものを探してみよう。日本語では、「手に入れる」「手に入る」「手を出す」「手をつける」「手を引く」などがあり、それぞれ(2)のように用いられる。³

- (2) a. 私は一角獣の頭骨を手に入れた
 b. でも良かったわ、楽器が手に入って。
 c. …信子の父親が炭鉱事業に手を出して失敗して以来、
 d. …例の問題にはしばらく手を着けずに…。
 e. 衛律は…すっかり恥をかいて手を引いた。

これらは、文字通りの移動の意味に加えて、「手を出す」は〈ちょっとやってみる〉、「手をつける」は〈とりかかる〉、「手を引く」は〈それまでしていたことをやめる〉というような慣用的意味を表わす。⁴ 移動概念の意味役割に関しては、「手」は、(2a)と(2b)で到着点であり、(2c)-(2e)では移動者である。この相違は、助詞「に」と「を」が示している。

次に、hand を用いた英語の慣用的移動表現を、LDCE3の hand の項目から選び出そう。⁵ 行為者が引き起こす移動を表現する例文は(3a)-(3c)の3例あり、keep を用いた(3d)も含めれば4例となる。これらの下線部分は、それぞれ文字通りの意味に加えて、〈着手する〉、〈取得する〉、〈技量を保つ〉というような慣用的意味を表わす。移動の意味役割に関しては、いずれの例においても hand は移動者である点で一致している。

- (3) a. Larry can turn his hand to anything.
 b. They all want to get their hands on my money.
 c. I'll bring some tapes if I can lay my hands on them.
 d. You should work part-time, just to keep your hand in.

このような例とは対照的に、hand が到着点となる例は、行為者が引き起こす移動を表わす慣用表現としては、用いられないと思われる。hand が前置詞の目的語となっている事例はあるけれども、その場合、動詞が(4a)と(4b)のように状態を表わす have であるか、または、(4c)のように be 動詞であり行為者を欠く文であるかのどちらかである。これらにおいては、hand が物の到着点ではなく、物の位置(location)を示す役割を担っている。

- (4) a. They'll have a battle on their hands if they try to build a road here.
 b. Give them a call to let them know we have the matter in hand.
 c. The area is already in rebel hands.

次の作例(5)のように、行為者を主語として、物が行為者の手に移動することを表わす慣用表現は見つからない。また、このような作例に対する母語話者の反応は、否定的である。英語の話者2人に尋ねたところ、上の(3b)と(3c)は用いるけれども、下の(5a)と(5b)は用いないという反応があった。

- (5) a. *They all want to get my money in their hands.

- b. *I'll bring some tapes if I can put them in my hands.

ただし、次のような表現はあるので、行為者の手を到着点とする表現が全く無いとは言い切れない。
〈取得する〉のような慣用的意味にならない単純な移動表現であれば、行為者の手が到着点となる
ことがあるということである。

- (6) a. ...then he took the kite-line in his hand and went groping down one of the passages on
his hands and knees,... (MT200)
b. ...he put his face in his hands and burst into tears. (MT80)
c. ...he began to cry. He hid his face in his hands. (WM104)

ここまでの観察をまとめると、次のように言うことができる。日本語の慣用表現においては、「手」
を到着点としても移動者としても用いることができるのに対して、英語の慣用表現においては、
handを移動者とすることはできても、到着点とすることはできない。図によって表現すると、二つ
の型の移動は、図1と図2のようになる。図1は、行為者の手に物が移動する様を、図2は、行為
者の手が物に移動する様をあらわしている。2つの図で、大きい円は行為者を、その内部の楕円は
手を、その右の小さい円は物を表わし、矢印は移動の方向を表わす。

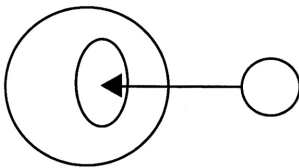


図1

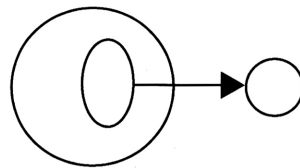


図2

(2a)の「私は一角獣の頭骨を手に入れた」は、図1の例であり、(2c)の「…信子の父親が炭鉱事業
に手を出して…」は、図2の例である。英語の(3b) They all want to get their hands on my money.
は、図2の例である。英語では、図1に相当する(5a) *They all want to get my money in their
hands.のような慣用表現はない。

英語では、日本語の「手に入れる」〈取得する〉に相当することを、get/lay one's hands on のよ
うに表現できることを上で見てきたが、名詞 hand を用いずに単に get, buy, possess などの動詞を
用いるほうが普通である。たとえば、ライトハウス和英辞典の「手」の項目には、次の例文がある。
ここでは、「手に入れる」が get または buy に対応していて、到着点は表現されていない。

- (7) a. その本はどこで手に入れましたか
b. Where did you get/buy the book?

同様の対応は、翻訳においても見られる。(8)は、日本語から英語への翻訳、(9)-(11)は、英語か
ら日本語への翻訳である。それぞれ、「手に入れる」が1語の動詞 collect, get, buy, possess に対応
している。

- (8) a. …ポスタアやプログラムの類まで苦労して外国から手に入れた。(川21)

- b. He...began laboriously collecting programs and posters from abroad. (ES24)
- (9) a. とにかくまず証拠を手に入れることでしょうな。(中野51)
- b. Well, the first thing is to get our proofs. (WM33)
- (10) a. …トゥアモトゥ群島の一つの島を手に入れた。(中野326-327)
- b. ...he bought an island in the Paumotus. (WM196)
- (11) a. たとえば女が恋をする。やつらは、相手の魂を手に入れてしまわないかぎり、満足しないのだ。(中野238)
- b. When a woman loves you she's not satisfied until she possesses your soul. (WM144)

(8b)-(11b)の英語の表現では、日本語表現の到着点である「手」に相当する語が現れない。それにもかかわらず、もし、これらの英文が移動の概念を含むものとして分析すると、主語は行為者のみならず、到着点の役割も果たしていることになるであろう。また、目的語が移動者の役割を担うことになる。この概念を、図式によって表現すると、図3のようになる。これは、図1から、手を表わす楕円を削除したものであり、行為者が、到着点をも兼ねている。

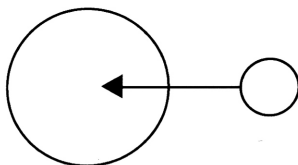


図3

2. 行為者の身体部位への言及

日本語で〈取得する〉ことを表わす際には、「得る」のように1語の動詞で表わすか、「手に入れる」のように行為者の「手」が到着点となる表現を用いるのに対して、英語では、1語の動詞を用いるか、lay one's hand on のように hand を移動者にするかのどちらかであることを確かめてきた。つまり、英語では、行為者が物を取得することを概念化する際に、hand を到着点とすることはできない。

さて、ここで、「手」と hand について上で観察したことを一般化して、身体部位全てに当てはまることとして述べ直してみよう。日本語と英語には次のような類似点と相違点があると仮定する。

- (12) a. 行為者の身体部位が移動者となる慣用表現は、日本語にも英語にもある。
- b. それに対して、行為者の身体部位が到着点となる慣用表現は、日本語にはあるけれども、英語にはない。

ここで身体部位と呼ぶものには、少なくとも手、口、耳、目が含まれる。以下では、(12)の一般化が成り立つことを、口と耳に関して観察していく。なお、目については、すでに嶋田(2003)で詳しく考察した。

2.1. 「口」と mouth, tongue

はじめに日本語の「口」を含む表現と、それに対応する英語の表現を見ることにしよう。「口」が移動者となる表現としては、話に横から「口を出す」があり、「口」が到着点となる表現としては、

言葉を「口に出す」「口にする」がある。(12a)によれば、「口」が移動者となることは、日本語と英語の両方で可能であると予想される。次の例では「口」が移動者であり、(13a)から順に、その出発点「横から」、到着点「ところへ」「批評に」が現われている。

- (13) a. 「おじいさま」と太った孫娘が横から口を出した。
 b. いきなり僕たちの話してるところへ口を出して、
 c. 一頃芸術の批評に口を出して、

He opened his mouth.あるいは He shut his mouth.のように、英語では、口(mouth)の状態変化は表現するのに対して、口の移動は慣用表現にはならないようである。その代わりに、(14a)の lay one's tongue to のような舌(tongue)の移動による慣用表現は用いられる。この表現は(12a)の仮説に従っている。

- (14) a. They wrangled interminably, he goading her into outbursts of anger just to watch her beauty at its best, she calling him all the names she could lay her tongue to. BNC EVC(2077)

「口」が到着点となる場合に関しては、(12b)で予想したように、日本語と英語の間に相違が見られる。たとえば、日本語から英語への翻訳(15)と英語から日本語への翻訳(16)–(18)を見る限り、「口に出す」にほぼ相当する英語は、(15b)から順に said a word, tell it, ask the question, speaking her mind であり、「口」に相当する到着点は、表現されていない。(その代わりに移動者が目的語として現われている。)したがって、これらは、仮説(12b)を支持する例である。

- (15) a. 心のなかだけのことで、口には一度も出しゃしませんけれどね。(川56)
 b. But she only thought it. She never said a word. (ES67)
 (16) a. マリラはアンに話したいことがあったが、いまは口に出さなかった。(村212)
 b. Marilla had something to tell Anne, but she did not tell it just then,... (LM146)
 (17) a. それまで口に出せなかったのである。(村168)
 b. She had not dared to ask the question before. (LM116)
 (18) a. レイチェル夫人は、自分の思ったことを、いつも率直に口にだすのをじまんにしていたので、(村13)
 b. Mrs. Rachel prided herself on always speaking her mind;... (LM7)

興味深いことに、英語では到着点を示す語 out が表現される場合がある。ところが、その out が位置を指し示す際の基準(landmark)は表出されない。たとえば、(19a)の日本語では、「この言葉」が到着するのは「口」であるのに対して、(19b)の英語では the words が到着するのは out と表現されるにとどまり、out が位置を決定するための基準は表現されていない。つまり、その位置が何の外(out)であるのか、明示されていない。(20)の対についても、同様のことが言える。

- (19) a. 彼は、ほとんどこの言葉を口にすることができなかった。(中野167)
 b. He could hardly get the words out. (WM101)
 (20) a. マッシュウが…なんでも口に出してくれるといいんだけど。(村56)

b. I wish he...would talk things out. (LM36)

しかし、この2例の out には、位置を指定するための基準が潜在していて、その基準は行為者（またはその身体の一部）に相当すると考えてよいであろう。そうであれば、(12)の仮説は、このような例にまで当てはまるように言い直す必要が出てくる。(12)は、このままでは、(19b)と(20b)には無関係である。どちらの例でも、行為者の身体部位は到着点になっていないからである。この2例で問題になることは、行為者の身体部位が到着点になるか否かではなく、到着点は out として明示されているにもかかわらず、その到着点を決める基準が行為者自身であることが明示されていないことである。この点に関しては、さらに広く事例を観察して、(12)の仮説との関係を考える必要があるけれども、本論では未解決のまま残すことにする。

2.2. 「耳」と ear

さて次に「耳」と ear による表現について考えよう。日本語の表現としては、耳を移動者にする「耳を傾ける」「耳を貸す」「聞き耳を立てる」、また、耳を到着点とする「耳に入れる」「耳に入る」「耳にする」「耳につく」がある。はじめに、(12a)の日本語と英語の類似点について確かめるために、日本語で耳が移動者となる例を見る。次の(21a)と(21b)では、「耳」が移動者で「話」と「言葉」がそれぞれ到着点となっていると考えてよいであろう。詳しく言えば、「話に耳を傾ける」と言うとき、この「耳」は聴覚器官のみならず、聴覚によって対象に注意を集中することまでも指し示している。つまり、メトニミーが生じている。その注意力の到着点として「話」と「言葉」がある。このように考えれば、(21c)の「話に聞き耳を立てる」ときにも、「話」が「耳」の到着点となっていると言えるであろう。

- (21) a. 蓮太郎はその話に耳を傾けて、熱心に眺め入った。
 b. 先生は私の言葉に耳を貸さなかった。
 c. 僕はどこかで壁が息をひそめて我々の話に聞き耳を立てているように感じられた。

英語でも、日本語によく似た言い方が可能である。次の例において、ear は、いずれも移動者である。ここでも、メトニミーが生じて、ear の指示対象は注意力にまで拡張し、その到着点が(22a)と(22b)では to で始まる前置詞句によって示され、(22c)では間接目的語 him によって示されている。

- (22) a. ...you can earn not only their confidence, but their gratitude, by turning an attentive ear to their discourse. (WM162)
 b. The owners turned a deaf ear to such an expensive demand. BNC B77(671)
 c. Would it help if I go and lend him a sympathetic ear? BNC HR4(1134)

次に、耳が到着点となる場合について考えよう。(12b)によれば、この場合日本語と英語の相違が見られるはずである。つまり、日本語には行為者の耳が音声の到着点となる慣用表現があり、英語にはそのような表現はないことが予測されている。しかし、実際にはどちらの言語においても、行為者の耳が音声の到着点となる概念化はなされない。日本語の例としては、(23)の例を挙げる。ここで表現された出来事においては、人物の意味役割は行為者というよりは、経験者(experiencer)にはるかに近い。言い換えると、人物は、聴くつもりで耳を傾けたり意識を集中したりするのではなく、気が付くと音声を認識しているのである。上で見た「手に入れる」「口に出す」の場合には、手

や口が到着点であっても、行為者が意図的に取得したり表現行為を行なったりすることが表わされる。しかし、「耳」が到着点となる例では、人物が声や音を意図的に聴くのではなく、声や音が自ずから人物の耳に到るのである。つまり、聞こえてくるのである。

- (23) a. 鮎太は、突然女の声を耳にして立ち止まった。
 b. 学校へ行っても、講義はろくに耳に入らない。
 c. 森の中の道を歩いているうちに奇妙な音が耳につくようになった。

英語では、(24)のように ears が到着点となるときには、主語 (his words と the rumours) が移動者である。注意すべき点は、(24)のような例は、移動表現ではあるが、そこには行為者が存在しないことである。したがって、これらは(12b)の仮説の反例とはならない。

- (24) a. His words came clearly to her ears,... BNC G1S(2800)
 b. The rumours must have reached Richard's ears — BNC EFV(1518)

また、次の例(25)では、主語 she が人物を示すけれども、この文には移動を表わす要素がないので、前置詞句 in her ears は、到着点ではなく位置を表わす。したがって、この例は、(4b) ...we have the matter in hand. に似ていて、(12b)の一般化とは無関係である。

- (25) ...she...could almost hear his laughter in her ears. BNC HH9(1946)

聞くという出来事を、耳に音声到着することとして概念化する際、その概念化は、行為者が自分の耳に音や言葉を移動させることとしては成り立たず、行為者が関与しない移動として成り立つことを上で確かめてきた。最後に、英語から日本語への翻訳を手がかりに、日本語と英語の対応について考えてみよう。(26a)の日本語は、耳への移動表現である。対応する英語(26b)は、動詞 hear による表現である。どちらにも行為者は存在せず、(26b)では経験者が主語として現われている。(27)についても、同様の概念化がなされている。これらとは対照的に、聞くことを、音声は耳へ移動することとして概念化し、さらに、行為者が表出している表現がある。(28)と(29)がその例である。(12b)の仮説によれば、英語には行為者の身体部位を到着点とする慣用表現はない。(28b)と(29b)の英語の表現もこの一般化には、従っている。なぜなら、これらには行為者に加えて、到着点としての耳も存在するけれども、その耳は行為者とは別の人物の耳なのである。

- (26) a. エミーの言葉が耳にはいらなかったし、(大181)
 b. He did not hear what Amy was saying,... (MT126)
 (27) a. アンは小さな悲鳴をあげたが、だれの耳にもはいらなかった。(村321)
 b. Anne gave one gasping little scream which nobody ever heard.... (LM224)
 (28) a. ハックは、老人の正直そうな目を見て、それから、その耳にささやいた。(大271)
 b. Huck looked into the old man's honest eyes a moment, then bent over and whispered in his ear: (MT185)
 (29) a. ...いつも黙って聞いてやる僕の耳に、尽きない愚痴話を聞かせてくれた。(中野107)
 b. ...he used to pour into my sympathetic ear the long list of his troubles. (WM66)

以上の考察を要約する。第2節のはじめで、「手」と hand についての観察を一般化して、(12)の仮説を立てた。これによれば、行為者の身体部位が移動者となる慣用表現は、日本語でも英語でも用いられるのに対して、行為者の身体部位が到着点となる慣用表現は、日本語にはあるけれども、英語にはない。この一般化が成り立つことを確かめるために、「口」mouth, tongue と「耳」ear を用いた表現を観察した。観察した範囲では、(12)の仮説に反する事例群は存在しない。

3. 結び

本論の結びとして、未整理の問題に2つの観点から触れてみたい。第1に、手、口、耳以外の身体部位に関しても、ここで仮定したことが当てはまるのかという問題が残っている。日本語の身体部位を表わす語のうち、ここで取り上げなかった語としては「目」「顔」「足」「腰」「身」などがある。これらの語が示す身体部位には、それぞれ異なった機能があり、日本語と英語の表現を対照しながら考察するとき、単に(12)の仮説に関してのみ調べても興味深い結果が得られるかどうか疑わしい。そもそも、特に手と口に関して(12b)の仮説が成り立つのは、手と口の機能によるのであろう。人が生きる際に身体部位が果たす役割は、それぞれ異なっている。それらひとつひとつに関して、日本語と英語の表現に別々の相違があってもおかしくはない。

例として、耳と目に関する表現を取り上げる。目については、「目」と eye の対照を嶋田(2003)で行なった。その観察と、この「耳」と ear の観察を比べてみよう。行為者の目が移動者としての役割を担う表現は、英語から日本語への翻訳(30)が示すように、日本語でも英語でも用いられる。したがって、目に関しても(12a)の一般化は成立し、この点で目と耳に関する概念化は、日英で同じである。対比するために、耳の表現として英語から日本語への翻訳(31)をあげる。

- (30) a. 二人は、めざす目的地に目をすえ、そこへ到達することだけを考えていた。(大102)
 b. ...and the boys fixed their eyes on the goal of their hopes, and bent to their work to win it. (MT72)
- (31) a. 彼らの話に耳を傾けてさえやれば、それだけでもう彼らの信頼ばかりか、感謝さええられるのだ。(中野269)
 b. ...you can earn not only their confidence, but their gratitude, by turning an attentive ear to their discourse. (WM162) = (22a)

行為者の目と耳が移動者となる概念化は、日本語でも英語でも可能であるのとは対照的に、目と耳が到着点となる概念化は、日本語と英語の間で相違が見られる。耳に関しては、ある人物の耳が到着点となる場合に、その人物は行為者ではなく経験者であり、このような表現は日本語にも英語にもあることを上で見てきた。(23)と(24)の例を(32)と(33)としてもう一度あげる。

- (32) a. 鮎太は、突然女の声を耳にして立ち止まった。
 b. 学校へ行っても、講義はろくに耳に入らない。
 c. 森の中の道を歩いているうちに奇妙な音が耳につくようになった。
- (33) a. His words came clearly to her ears,.... BNC G1S(2800)
 b. The rumours must have reached Richard's ears — BNC EFV(1518)

対照的に、目に関しては、人物の目が到着点となって〈見ること〉を慣用的に表わす言い方は、日本語では用いられるけれども、英語では用いられない。例えば、日本語から英語への翻訳(34)では、

目に対応する名詞は英訳には現われない。

- (34) a. 正門を這入ると、…銀杏の並木が眼に付いた。(夏38)
 b. Entering the main gate, he noticed first of all the twin rows of gingko trees.... (JR51)

確かに、英語では視野が到着点となる表現は可能である。例えば、LDCE3には into view を用いた次の例文がある。As we rounded the bend in the river the castle came into view. しかし、...the castle came into my eyes.とは言わないであろう。英語では、視野ではなく、目そのものが到着点となって視覚経験を表わすことはない。以上のように、耳は、到着点として、日英で同じように概念化されるのに対して、目は日本語でのみ到着点となって視覚経験を表わす。このように、身体部位によって概念化の相違がずれているので、単純な一般化によって問題を理解することはできない。

第2の問題は、(12)で捉えようとした日本語と英語に関する相違が、一体どのような原因によって生じるのかということである。私は日本語と英語の対照研究を始めたとき、語順が語の意味解釈にどのような影響を与えるのかを考えることを目的としていた。そのとき暫定的に提案した文の理解についての仮説は、(12)で記述した日本語と英語の相違にどのように関わるのかという問題が生じてくる。(12)で描いた日英の対照は、文を理解する際の語順の相違によって説明できるのだろうか。かつて提案した解釈確定順序の仮説と、句の情報分布の仮説は、そのままでは、(12)の記述に説明を与えることができない。⁶ それでは、どのように述べ直せば、(12)を扱うことができるのだろうか。あるいは、文の解釈、概念の合成に関わる何らかの原則を付け加えることになるのであろうか。いままで記述してきた日本語と英語の相違は、どのように見なすことが適切なのだろうかという問題が残っている。

注

- 1 引用例の下線は、問題点を明確にするために私が付加したものである。他の例文の下線も同様である。
- 2 意味役割については、Langacker (1991: 282-293, 2000: 27-34)を参照。
- 3 日本語の用例のうち出典を示していないものは、全て『新潮文庫の100冊』から選んだものである。
- 4 〈〉内の定義は、『例解 新国語辞典』による。
- 5 ここで移動表現と呼ぶものは、主に、行為者、移動者、(到着点を含む)経路から成り立つ概念を表わす文である。行為者の存在しない移動表現、行為者と移動者が一致する移動表現については、嶋田(1998)を参照。
- 6 文を理解する際に働く原則として提案した2つの仮説、すなわち、解釈確定順序の仮説、および、句の情報分布の仮説については、嶋田(2001, 2002)を参照。

参考文献

- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II : Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- Langacker, Ronald W. (2000) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- 嶋田裕司 (1998) 「移動表現：心的映像と抽出理論」『群馬県立女子大学紀要』第19号 (63)-(75)。

嶋田裕司 (2001) 「語順と語の多義性」『群馬県立女子大学紀要』第22号 (25)-(38)。

嶋田裕司 (2002) 「日本語と英語の知覚動詞：理解の過程が語の意味に与える影響」『群馬県立女子大学紀要』第23号 (13)-(24)。

嶋田裕司 (2003) 「『目』と eye による視覚表現」『群馬県立女子大学紀要』第24号 (25)-(34)。

林 四郎 (他) (2002) 『例解 新国語辞典』第六版 三省堂。

小島義郎・林 茂 (編) (1984) 『ライトハウス和英辞典』第1版 研究社。

LDCE3 = *Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition*, (1995) Longman Group Ltd.

用例出典

() 内の文字は本文で言及する際の略号を示す。西暦は作品の初出年ではなく、使用した版の出版年をあらわす。

(川) 川端康成 (1987) 『雪国』新潮文庫。

(ES) Edward G. Seidensticker (tr.) (1957) Yasunari Kawabata *Snow Country*, Charles E. Tuttle Company.

(夏) 夏目漱石 (1990) 『三四郎』岩波文庫。

(JR) Jay Rubin (tr.) (1977) Natsume Soseki *Sanshiro*, Kodansha English Library, Kodansha International.

(WM) W. Somerset Maugham (1944) *The Moon and Sixpence*, Penguin Books.

(中野) 中野好夫 (訳) (1988) モーム『月と六ペンス』新潮文庫。

(MT) Mark Twain (1986) *The Adventures of Tom Sawyer*, Penguin Books.

(大) 大久保康雄 (訳) (1987) マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』新潮文庫。

(LM) Lucy Maud Montgomery (1992) *Anne of Green Gables*, Bantam Books.

(村) 村岡花子 (訳) (1987) モンゴメリ『赤毛のアン』新潮文庫。

『新潮文庫の100冊』CD-ROM 版 新潮社。

BNC = *British National Corpus, World Edition*, (2000) the Humanities Computing Unit of Oxford University.